

(八) 田舎の香水

山羊飼も2年目に入ると、女房は何かと要領がよくなってきた。たとえば冬、山羊を空き地の木にくくりつけて枯れ草や枯葉を食べさせる。自然界を考えてみれば、草食動物は冬、枯れ草を食べねば食べるものはない。1年目は、初めての場所だと女房が見えなくなったとたん、メエエと鳴き出し、「小さい子と一緒に」と女房を嘆かせていたが、2年目になると、食べ物がある間は、家が見えなくても、飼い主が傍についていなくても、山羊は文句を言わなくなった。山羊の側も要領がよくなってきたとみえる。

ただ夕暮れが近づくと家が恋しくなり、やかましく女房を呼ぶ。

あたかも幼な子が母を呼ぶ如し。

「あたしゃこんな角の生えたのを産んだ覚えはないけどね」とぼやきながら、女房は山羊を連れに行く。

いざ帰れるとわかると、山羊は恐ろしいほどの力で引っ張る。

1年のうちで一番山羊の力が強いのは妊娠中、特に妊娠末期で、要は体重が多い時である。体重は力だ。ボクシングでも柔道でも体重別に競技をする理由が、一回りでかく重くなった山羊を相手に綱引きをやってみると、つくづくよく女房にはわかる。

山羊は必ず前へ前へと歩きながら草を食べる。

木につながれていると、木の周りをぐるぐる歩きながら食べるので、鎖は幹の周りに三重四重に巻きつき、鎖と鎖の間にはつる草だの灌木の切れ端などが盛大に取りこまれる。飼い主が鎖をほどく際にはその邪魔物を取り除くのがひと仕事。ウカウカしていると、ゆるめたばかりの鎖を山羊がグイと引っ張り、アッという間に女房の指が鎖と幹との間に挟まれ、血がにじむ。山羊の動作や呼吸をうかがいながらの作業である。

さあ鎖が木から離れたとなると、山羊はものすごい勢いで家まで走って帰る。犬と違って「待て」はきかないから、女房は引きずられないよう必死で走らねばならない。山羊が角を振りふり女房を引っ張って全力疾走する姿を見ると、近所の人

みな笑顔になる。

「今度、馬車ならぬ山羊車を引かせてみるか」と女房は思わないでもないが、まず人間の命令には従わないだろう。山羊と比べると、馬はかなり従順なのだと思う。



運悪く空き地の端に葛（くず）の蔓（つる）なんぞ這っていた日、ブービートラップよろしく女房は足を引っ掛け、膝の皿をまともにアスファルトにぶつけた。1 週間は足を引きずって歩くハメになった。

いっぽう亭主は横着をして、鎖を放し、山羊がひとりで帰るに任せる。

「必ず小屋に帰るからいいじゃないか」と言う。女房がそれをしないのは、山羊の交通事故がコワイからだ。

新興団地のどん詰まりは袋小路、団地の人間と団地に用のある人間しか通らないとはいえ、夕暮れ時は帰宅やお迎えの車が行き来する。その前へデカイ山羊が飛び出したら、運転手は仰天してハンドルを切り、山羊は無事でも車がよその塀へ激突するかもしれない。山羊が死んでもまあ諦めはつくが、山羊のおかげで自動車事故、なんて想像したくもない。運転手の保険会社も、道に山羊が出てきて、なんて理由には目をパチクリしたあげく、まちがいなく飼い主の女房に 100 パーセント賠償責任を負わせてくるだろう。車に人、塀まで壊れたら 100 万円ではきくまい。下手したら 1,000 万超えるだろう。もし人が死んだりしたら 1 億だ。

冗談ではない。

こういう時は、山羊にかかる保険はないものか、と女房は広い空を見上げて考える。

ないだろうなあ。

そうだ、生協の保険に、「家族がおこした損害のすべてを保証します」というのがあった。月 100 円の掛け金で入ってるんだった。

しかし、山羊は家族か？

違うよなあ。

山羊の食べ物が枯れ草だけではちと可哀そうだから、夫婦は牛用の配合飼料を農協から買い入れ、近所の畑からは収穫後の売り物にならない白菜を、なるべくお百姓さんに一言挨拶してから、拾ってくる。

この夫婦の家の裏は広大な芝畑で、3年に2回ほどだろうか、カタカタと音を立て、手押しの機械で芝を根と一緒に30センチ角ほどの大きさに切り取る。それを東南アジアか南米出身だろうか、女房の知らない言葉を話す外国人労働者が10枚1組に束ね、長いながいトラックまで運んでいく。畑からは収穫のたびに芝と一緒に表土が消えうせるので、お百姓は数年に一度、ものすごい量の鶏糞を入れて耕し、芝の代わりに茨城名産の白菜ないしはキャベツを植える。

土地の人に聞いた話では、畑の地主はまず「芝屋」さんに土地を貸し、「芝屋」さんは時々「白菜屋」さんにまた貸しするらしかった。「芝屋」さんとは芝栽培専門の農家で、「白菜屋」さんは白菜栽培専門の農家である。

この鶏糞、ちゃんと時間をかけて発酵・乾燥させたものを入れてくれるといいのだが、手間暇かけた肥料は高い。いつぞやの夏の盛りには、ほとんど生ではないか、という鶏糞をダンプ23台分、サッカーコートほどの大きさの畑に点々と盛ってあるのが女房の書斎から見えた。

臭い。

猛烈に臭い。

鼻が曲がるどころか、もげそうである。

ご飯時は食欲も失せる。

そのわりには誰も痩せないが。

蠅（はえ）が大発生して、女房と子どもは家中蠅たたきを持って歩き、1日で36匹の蠅をたたき殺した。

「田舎の香水」は、空の広い、気持ちのいい景色の代償である。

冬の間には、山羊の食料の草が次第しだいに尽きていく。

ただ、家の裏の、団地の外の崖下の南側の斜面は暖かいらしく、一足早く、犬ふぐりだの踊子草（おどりこそう）だのが、イネ科の雑草に混じって生える。亭主はそこへ杭を打った。山羊は大喜びである。その後は雑木林の端っこの木の垂れ下がった大枝にくくったら、枝が山羊の馬鹿力に負けて折れ、山羊は脱走した。広大な芝畑を犬といい気持ちで歩いていた女房は、白菜畑の傍を山羊がのんきに歩いているのを見てギョッと目を剥（む）いた。

茨城特産の白菜は巨大である。山口県で食べる白菜の 2、3 倍はあるだろう。当然値もはる。売り物の白菜の芯の柔らかいところばかり次から次へと食い荒らしてくれたら、お百姓さんに頭を下げて謝るだけでは済むまい。弁償だ。女房は血の気が引きかけた。

まずは女房、当時はまだ山羊と仲の悪かった犬どもを急いで連れかえって小屋の鎖につないで置いて、それからあわてて白菜畑まで戻り、今度は山羊を連れ帰った。その後で改めて白菜畑を見に行くと、当のお百姓さんが見に来ている。

「間一髪、間に合った。白菜屋さんが来た時に山羊がいなくてよかった。イヤ危なかった」と背中には冷や汗がにじみかけている。

女房、とりあえず素知らぬ顔でニッコリ笑って「見事な白菜ですねえ」と世辞を言い、内心戦々恐々としながら、白菜屋さんの注意を引かないようにあくまでコソソリと、並んだ白菜を点検した。

食われた痕跡はない。

女房はホッと安堵の胸をなでおろした。

山羊の寝床用に稲わらを分けてくれと知り合いの農家に頼んだら、わらを束ねる作業に来いと言われ、下の息子を連れて夫婦は出かけた。

イヤイヤ、かがむことの多い農作業は重労働である。

「あしたはここにくるよ」農家のばあ様はニヤリと笑って自分の両腿をピシヤリと叩いた。

予告通り、翌日は夫婦と息子の 3 人全員、腿その他のひどい筋肉痛に見舞われ

た。

亭主の生まれた家は農家である。

「子どものころは牛がいたから、毎日『押し切り』という道具でわらを切って牛にやるのが俺の仕事だった」と亭主は言う。確かに山羊はわらを食べる。が、寢床兼トイレの残骸の汚れたわらは食べない。

わらが汚れると、亭主のつくる家庭菜園に入れる。が、わらは土に混ぜこんでも超絶腐りにくいことがわかり、亭主はいい顔をしなくなった。この夫婦が子どものころ、わら葺（ぶ）き屋根や茅（かや）葺き屋根の農家は珍しくなかった。わらは腐りにくいから屋根にも使えるわけだ。

英語でも thatch（サッチ）は「屋根に草を葺く」という意味で、イギリスの一昔前の鉄の女宰相サッチャーさんの祖先は、たぶん草で屋根を葺（ぶ）いていた職人さんだろう。麦わらなんぞを使っていたらしい。東洋と西洋にも、けっこう共通点はあるのだ。

汚れたわらを時々取り換えていると、わらの量がどうも1年分もちそうにない。

山羊農家の山羊の寢床はおがくずだった。稲のもみ殻でもいいと、最初に紹介してくれた農協の職員さんは言って、カントリーエレベーターなるドでかい米の倉庫の場所を教えてくれたっけ。もみ殻は無料で分けてもらえと言う。これはわらよりよさそうだ、と亭主と女房は家中のでかい袋をかき集め、乗用車でもみ殻をとりに行った。

1匹の山羊を飼うのに、ここまでいろんな労働や心配がついてくるとは到底予想していなかった。

生き物は大変だというわけである。

夏の間、母山羊は大量の水を飲む。炎天下で草を食べさせていると、1日に10リットルは飲むだろう。口を水につこんで頬をすぼませ、スウウと一気に大量に吸いこむのである。

おや、犬や猫と違うね。

舌をひんぱんに出し入れして水を飲む犬と比べ、はるかに効率がいい。犬猫は人

間に比べて口がとんがっていて、水をすすするには、口の両側から空気が漏れてできないだろう。よく見ると、山羊には多少の唇(?)があるようでもある。歯をむいて笑う(?)のは、女房が見た限りでは、なぜか、雄山羊が、発情した雌の部分の臭いだ時だけである。もっとも、「嬉しい」よりは「臭い!」という顔に見えるが。犬も威嚇する時は唇(?)を上げて歯をむき出すから、口の周りが動かないわけではない。

人間の唇は、鏡をみていると、口の中の粘膜がめくれて外に出て、乾いたものだろう。

子どもの英検の問題集には、この唇があるからこそいろいろな発音が可能となり、人間は言語を発展させることができたのであり、言葉を話すという他の動物にはない人間の特殊性は、大きな脳みそのためだけで可能になったのではない、と載っていた。犬猫山羊の顔を毎日見ていると、この論拠がよく納得できる。

山羊は、飼い主は飼い主として認識しているらしく、女房が車で帰ってくるとメエエと鳴く。

「おかえり」だ。

犬もワンワンと吠えるから、女房は律義に、「雪ちゃんただいま、ジョンさん吉ちゃん、ただいま」と言ってやる。玄関を入ると猫がのそのそと現われるから、これも「おかえり」だろう。

が、犬猫と山羊はずいぶん違う。犬には飼い主の意思に沿おうという可愛げや従順さがあるし、甘えも嫉妬も見せる。飼い主が叱るとシュンとなり、撫でると嬉しそうにするから、人間と犬の間にはコミュニケーションが成立しているという感じがある。猫は英語でも「自分のほうが主人で、人間に飼わせてやっている」と言うくらいだから従順さはないが、人間に甘えるのが好きだから、やっぱり愛玩動物である。

が、山羊には、飼い主の意思を尊重する気配はまるでない。自己主張だけはする。あっちへ行くのがイヤだとなったら、踏ん張って抵抗する。家に早く帰りたい時にも、飼い主のご機嫌など気にはしない。

結論。

山羊は「家畜」だ。

ペットではない。

物置の隅から、子どもたちが飲まなかった大量の人参（にんじん）ジュースが出てきた。賞味期限はとっくに過ぎている。女房が味見してみると、ま、大丈夫。試しに山羊にやってみると、甘いのが気に入ったか猛烈な勢いで飲んだ。1リットル飲み干すのに2分とかからない。山羊が頬をすぼませ、また膨らませてはすすむ姿に女房は笑いころげた。

戸棚の奥から出てきた湿気（しけ）た煎餅（せんべい）も、溶けかけた飴玉も、正月の残りの黄粉（きなこ）も、豆腐屋さんがタダでくれたおからも、山羊は大歓迎。何か人間がおやつを持ってきてくれたと悟ると、山羊はゆっくりと体を左右にゆすっては、左右の前足を代わる代わる持ち上げては踏み下ろす。いかにも待ちかねている感じである。

ハハア、これが山羊の「嬉しい」か。

その話を3軒隣の歯抜けのばあ様になると、彼女も喜び、古くなったパンだの菓子だのを山羊にくれるようになった。あげくの果てに干したひじきの古いのまで持ってきたのには、女房首をひねったが。もの好きな亭主が湿気た海苔（のり）をやると、山羊が上顎にひつつくの難渋して下顎を左右にモングラモングラ動かしていたのは人間と同じである。

近所の別の親父さんは、植え替えの際の大根葉なんぞもくれる。近所づきあいはしておくものだ。

最初の仔山羊は、種つけ代として7月に引き取られる筈が、長野県から来る山羊屋さんの都合に合わせ、9月になった。女房は近所からトラックを借りて山羊を乗せ、連れて行った。山羊は高いところが好きだから、荷台に乗るのに抵抗はない。



これは仔山羊でなく母山羊

山羊を乗っけて運転していると、まちがいなく人の注目を引く。

信号で止まってバックミラーを眺めると、後ろの車ではまずこちらを指さし、次に携帯を取り出して写真を撮り始める。

それが信号ごとに繰り返される。

女房が学校に連れて行く時に山羊と一緒にトラックでもいいかと尋ねると、高校生の娘は目を吊り上げて「死んでもイヤ！」と叫んだ。

母山羊を分けてもらった農家に着くと、仔山羊を見て「丈夫そうないい山羊だなあ」と言われる。

その家の山羊は四六時中、狭いところに1メートルほどの綱でつながれて、配合飼料だけで飼われているから、ロクに歩いていない。足が細い。「ウチの山羊は表に出て草食ってっから」と女房は少々鼻が高い。

まだ暑い日で、女房はほかの用事と重なってバタバタ忙しく、疲れてしまったらしい。蕁麻疹（じんましん）が全身にできて皮膚科行きとなった。

母山羊がどれだけ仔を追って鳴くか、女房はヒヤヒヤしていたが、案に相違して母山羊は知らん顔。

フム。

以外にクールな子別れであった。